

● 沖 縄

上 地 隆 裕

2017年度本県洋楽界は、概ね地元勢主体の公演で推移した。そのため特に大小アンサンブルの分野では、外来公演が皆無となり、ファンにとっては不満が残った。

しかし一方、そのような状況は、地元勢に刺激的かつ挑戦的な活動の場を開拓させるものとなり、これまでにない収穫を齎した。

地元勢が活躍の場を広げる際に最も大事なものは、聴衆動員と密接に関わる日時の選択だが、望む時に使用できるコンサート施設の確保も同様に大事な課題だ。

現在本県には、二つの大きな離島（宮古島、八重山島）のものを含め、本格的なクラシカル演奏会を提供可能な公共施設が15館（新しく建設が決まった那覇市民会館を入れると16館）稼働中である。しかしその大半が、学校関係の吹奏楽部その他の行事で使われる。更に民謡の盛んな土地柄故、合計300を越す琉舞道場や民謡教習所の発表会等にも使われるため、クラシカルのコンサートばかりに用途が向けられる、というわけには行かない。

そのようなホール事情等を考慮すると、洋楽の将来的発展に係るコンサート専用ホールの建設をも、今後の本県洋楽界にとって最重要課題の一つ、として捉えておく必要がある。

さてここから2017年度における本県洋楽界各分野の動きに入ろう。

まず最も大きな注目を集めたのは器楽をはじめとする独奏部門であった。主役は相変わらず外来奏者達で、特にピアニストのジョン・ナカマツ（第十回ヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクールの覇者。本県東村出身の北米移民三世）とソプラノのエヴァ・メイ、そして今世紀を代表するチェリストで十年ぶりの来県となるミーシャ・マイスキー、更に何と宮古島だけの公演（というよりその内容は不完全なものだった）に参加したサラ・チャンに三浦文彰らのヴァイオリニスト達である。

また県出身者としては初の試みとなる分野での活躍もあった。全国規模の劇場演劇公演、および人気TVドラマでの演奏及び弦楽指導、そして外来奏者の伴奏分野への進出である。まず前者では上地さくらが、演劇＝本年度ノーベル文学賞受賞者イシグロ・カズオ原作による「夜想曲集」全国公演でチェロ、及びTV連続ドラマ「カルテット」では妹の美実（ヴァイオリン）と共に弦楽指導を担当した。

加えて三人目の仲松は、SWR交響楽団＝旧シュトゥットガルト放送交響楽団首席ヴィオラ奏者「ポール・ベシュティ」の公演で伴奏者を務め、それぞれ本県演奏水準の高さを示し、後進に新しい大きな目標を与えた。

更に声楽の砂川涼子（Sp）と与儀巧（Tn）の二人はデュオを組み、NHK＝TVの公演企画に登場。中央での活躍の一端を披露し、特に砂川はニュー・イヤー・オペラ・コンサートにも出演。県出身者として群を抜く活躍を示した。その独奏者部門の最後に特記しておきたいのはJ・ナカマツの存在である。彼はソロイスト達の到達目標点として、大きくクローズ・アップされてしかるべきだ。しかしクライバーン・コンクール優勝時、

当地ではその事実さえ全く知らされなかった。その点は、マスコミの怠慢と言えよう。

本報告の末尾として、県勢とその他の団体の活躍を俯瞰しておきたい。まず本県の主力4楽団＝琉球交響楽団、琉球フィル、沖縄交響楽団、沖縄フィルは順調に定期公演をこなした。特に琉響、琉フィルは、公演新企画の創出にひと工夫を見せ、聴衆に歓迎されており、今後もその成果が目目されると思う。

本土からはスーパー・キッズ・オーケストラが来沖初公演を実現。児童青少年に刺激を与えた。地元奏者達によるリサイタル及びオペラ界も好調を維持。特にいずれの分野でも新しい聴衆層開拓への熱意が見られ、将来に大きな希望を抱かせる内容であった。（完）